

2013 年度 第 2 回 全体研究会 アジアで活躍する仏教指導者（第 1 回）

- 報告題目：Lay Buddhists in the Contemporary India
- 開催日時：2013 年 4 月 30 日（火）17：00～19：00
- 場所：龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室
- 報告者：Dhammachari Lokamitra 師（Jambudiva Trust 代表）
- ファシリテーター：中村尚司（龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター・研究フェロー）
- コメンテーター：嵩 満也（龍谷大学国際文化学部教授、RINDAS センター長）
- 参加者：22 人

【報告のポイント】

Lokamitra 師は、現代インドにおける在家仏教徒運動の主導者の一人である。師は、インドにおける在家仏教運動の展開について概説しつつ、その社会的な意義と問題点、今後の可能性について述べた。

【報告の概要】

Lokamitra 師は、1947 年に英国で生まれ、1974 年に Sangharakshita が創始したヨーロッパの著名な仏教組織である Western Buddhist Order (WBO) で得度し僧侶となった。1977 年にインドに来てからは、主にナグプルとプネを中心に当国で WBO の活動に努めている。また Nagarjuna Institute を拠点としてアンベードカルの教えを説き、ダリット（旧不可触民）仏教における指導的な地位を確立している。

師が僧籍を得た WBO における入門式の本質的な部分は、仏・法・僧の三宝に帰依することであり、この点については通常のサンガと変わらない。また、活動の中心となるのはパーリ経典に基づく実践であり、十善戒によって行動を律し、瞑想も行う。組織の一員であることを示すために、袈裟を身にまとう。他方、celibacy（禁欲主義）は肯定も否定もされておらず、それへの拘りが個々人の霊性を阻害しないことを望んでいる。すなわち、出家者でも在家仏教徒でもない、「非僧非俗」的な立場をとっている。ただし、彼らのサンガは性別によって分離されており、それは、同性間の方が信頼関係を築きやすいからである。彼らの行う

正命（仏教徒として正しい生活を営むこと）の実践は、自己変革を通して社会を変え、やがては社会の基礎を築いていく力をもっているという。

師は、1977 年にインド巡礼をした際、たまたまアンベードカルの改宗 21 周年記念祭に遭遇した。そこで、何百万もの差別をうける人々が、ダルマの実践を通して個人と社会の生活を改善しようとしている姿に感動し、アンベードカル信徒と共にインドで活動していくこととなった。アンベードカルを師と仰ぐ Maharashtra のサンガでは、現在、皆でアンベードカル／ブッダの教えを学びながら、女性を中心に各種の年中行事や人生儀礼に携わっている。アンベードカルは、仏教に改宗してから 6 週間後に死亡したため、彼の信徒たちは指導者不在のなか混乱や不遇を経験し続けた。だが、そうした困難にもかかわらず、信徒たちは教えを学び、瞑想を行い、人間としての尊厳のある生活を送りながら、よりよい社会をもたらそうとする試みを続けてきた。

メンバーの中には、より本格的な仏教を求めて WBO への加入を望む者も出てきた。師らは、男性のための、ついで女性のためのサンガを形成し、また正命の実践として各種の社会事業を行ってきた。現在、このサンガの専属的なメンバーは、インドで 600 人以上、世界では 1,800 人以上を数える。さらに、ナグプルに設立された修行施設である Nagarjuna Institute には、インド国中から多くの若者が集い、8 ヶ月間にわたり住み込みで指導を受けている。彼らの多くは、出家僧になろうと考えているわけではなく、仏法によって自らを力づけ、自己をとりまく状況を改善していくことを目指している。彼らが在家の仏教徒であることに強く望む背景としては、ヒンドゥー教の社会では家族主義が強調され出家は忌避される傾向にあり、またアンベードカル自身が、サンガは社会からの駆け込み寺ではなく、むしろ社会参加すべき存在であり、在家信徒を包摂してこそサンガは社会のモデルとなりえると考えていたことなどがある。

師は最後に、在家者も含めた仏教運動の問題として、自己利益にとらわれない出家者集団とは異なり、資産の問題などが軋轢を生みだすことや、あるいはダリットの内部にも存在するカースト間の障壁が今後も運動の阻害要因になりうることを示唆しつつ、だが、現在もダリットにおける仏教への関心は高いことを確認した上で、その運動が成功すれば、現代の民主主義と、世界に広がる仏教への貢献ができるであろうと結論した。

【議論の概要】

嵩氏は、アンベードカルの死後、ダリット仏教の運動が広がっていった背景についてより詳しい説明を求めた。師は、アンベードカルへの尊敬の念の高さに加え、自らのアイデンティティを確保したいという人々の願いや、人間の尊厳への要求が、運動の拡大の要因としては大きいという。ただし、仏教のサンガは、ヒンドゥー教が主流のインドではいまでも軽視されがちであり、スリランカやタイとは事情が異なることを付言した。

若原雄昭氏は、インドでの実地調査から、アウトカーストの集団のなかにはアンベードカルをあまり評価していないところもあるという見聞を得たが、この点についてはどうなのかと質問をした。師は、カースト間での反目がいまだ根深いため、アウトカーストの集団間においても、交流が困難な場合があることがその理由として考えられるとした。ただし、将来的にはそうした壁を乗り越えて、カースト間の連帯を創出しようと指摘した。

藤能成氏は、師の関与しているサンガには、正統的な指導者はいるのかと問うた。師は、サンガには位階制度のようなものはなく、経験のある指導者が、自らの身をもって模範を示すようなかたちで教育が行われていると述べた。

最後に中村氏が、師の報告によって、現代インドの在家信徒を中心とした仏教の状況は、浄土真宗のそれとも近似したところがあることが見えてきたという指摘をして、研究会を締めくくった。

